唐代古文運動の形成過程

林田慎之助

一

明の胡應麟の『少室山房筆叢』は中唐期の文人・元結の著書『元子』十卷にふれて、元結は盛唐期の李華・蕭穎士についで、駢文を解體した古文家であるとのべたのち、それぞれの古文家の文體の特質と差異に着目して、次のように論及している。

大概、六代より以還、文は俳偶を尚ぶ。唐の李華・蕭穎士及び元次山の輩は、始めて解散して古文を爲る。蕭・李の文は平典を尚び、元・獨(孤及)は矯峻艱澀、怪にして且つ迂に近し。(九流諸論卷中)

この胡氏の論は、平典と艱澀の文體差を認めながら、駢文の文體樣式である俳偶を解散させて、古文をつくりはじめたのが、蕭・李・元・獨の諸公だといっているのだから、所謂「唐代古文」運動の始動期を、この四人の文人諸公の活躍期においていたことになる。

すでに明人の胡氏にかかる説があるにもかかわらず、その後の文學史家の唐代古文源流説になると、まことに諸説紛々である。宋の陳振孫の『直齋書錄解題』は陳子昂起源説を唱え、[1]近代の郭紹虞氏は劉勰の『文心雕龍』までさかのぼり、[2]羅根澤氏は西魏の末年に蘇綽が尚書の誥命の文體にならって古文を制作した時期にはじまるとみている。更には近人錢多父氏は羅氏の説をうけて、その蘇綽と隋の李諤の文説に古文運動の準備期を求めている。[3]

陳振孫の説は光輝ある先祖の偉業として、その功を陳子昂に歸せしめる私的な發想から出ているきらいがあり、これは暫く措くとしても、他の近代の諸家の説にみえる特徴は、韓愈・柳宗元の文學觀につらなる載道主義的文學論の系譜を文學思想史の上からとりだし、その類似性を各々の祖型に發見することによって、彼等のなかに源流をみようとする方法である。一見妥當性をもつかにみえる諸説が、その方法においてすでに恣意的であるのは、唐代の文體改革を具體的な歴史狀況のなかから必然的に發生した意識的な思想と文學の改革運動としてとらえる視點が缺落しているがためである。云い換えるならば、八世紀後半から九世紀初頭にかけての中唐期において、中國散文史に畫期的な價値轉換をもたらすような文體改革がなぜ勃然としておこってきたのか、しかもその後清末に至るまでの中國知識人の主要な文體として古文が定着するに至ったのかという問題意識が放棄されているからである。唯恣意的に先祖歸りを樂しむとすれば、なにも劉勰・蘇綽・李諤に限ることはあるまい。韓柳が文體改革の規範として仰いだ先秦及び漢代の諸家の散文にその源流を求めることも可能な筈であ

る。

あらゆる文學運動の研究は、それに先行する時代の政治的社會的狀況があり、それに對應する文學的或は思想的な課題を意識した文學集團の存在があり、そのなかから運動が始動するという必然性が基本的に認識されねばならない。この基本的な認識が缺如するために、いたずらに時代と思想の狀況を超脱して、その源流となる類似的祖型を文學史に遡行して求めるという安易な方法にゆだねながら、みせかけだけの學問的操作に終始する結果を招いたものが、これまでの唐代古文源流說の實態であった。

これにくらべると、胡應麟の唐代古文始動說は、それを運動史として把握し、その形成過程に詳細な分析こそ加えてはいないが、すぐれた資質をもつ文學史家特有の鋭く深い洞察にうらうちされている正確さがあり、充分に說得性をもつ卓見である。卽ち唐代古文運動の頂點に位置する韓柳を起點として、それに先行する時代にあって韓柳と直接につながる思想的・文學的な人脈を逆にさかのぼるならば、必然的に李・蕭・元・獨の諸公にたどりつくからである。

拙論は此の胡氏說を踏まえて、これまでのこされてきた傳記的・文學的資料のなかから、その先覺的文學集團を復元し、その文學集團がどのような時期に、いかなる人脈のなかで構成されていったかを洗い出し、且つ彼等の思想と文體に關する考察を加えながら、唐代古文運動が推進され形成されてくる過程を可能なかぎり再構成することに留意したものである。

二

これまで、明の胡應麟の唐代古文始動說を卓見として紹介してきたが、實は唐人の梁肅に胡氏と同樣な論說をみることができる。

唐は天下を有して二百載に幾し。而るに文章は三たび變ず。初めに則ち陳子昂は風雅を以て浮侈を革む。次で則ち燕國の張公說は宏茂を以て波瀾を廣ぐ。天寶已還、李員外、蕭功曹、賈常侍、獨孤常州は肩を比べて出ず。故に其の道益々熾んなり。（全唐文卷五一八補闕李君前集序）

これによると、陳子昂・張說といった單獨古文家とは別に、李華・蕭穎士・賈至・獨孤及が輩出して文體革新の道が熾烈になったとみている。賈至と元結が入れ替っているだけで、胡應麟の說がこの梁肅の論說からでていることは分明である。にもかかわらず、拙論が胡氏說を卓見とみるのは、天寶以前の陳子昂・張說を切り捨てて、天寶以後に活躍した蕭・李・元・獨に古文始動期を明確な射程距離として据えることができたことに贊同するからである。それはともあれ、梁肅みずからが唐代古文運動の有力な推動者の一人で、その運動の渦中にあった人物だけに、これぐらい確かな始動說はないとみてよいであろう。

しかしながら、それでは李華・蕭穎士・賈至・元結・獨孤及・梁肅といった古文家がいったいどのような時代狀況のなかで、いかなる人脈と文學理念をもって古文を意識し、文體改革の運動を推進してきたのか、或は更にその人脈なり文學理念なりが、唐代古文の完成者である韓愈にどのような影響を及ぼすことになるのかという具體的な問題になると、殘念ながらそれほどあきらかにされていないのが現狀である。

そこで拙論はまず古文運動形成過程の人脈關係を、韓愈及びその兄の韓會を起點として掘りおこしてゆく傳記的操作からはじめてゆくこ

とにする。

韓愈の文集に「祭鄭夫人文」という一文がある。この鄭夫人こそ韓愈の長兄に當る韓會の妻である。幼にして父をなくした韓愈の幼少期から成人期に至るまで、變らぬ慈愛をこめて養育にあたってきた婦人であった。

嗚呼天の我が家に禍いし百の殃を降集す。我生れて辰の三歳にならずして孤たり。蒙幼にして未だ知らざるも、我を鞠する者は兄、死に在るも生くるは實に維れ嫂の恩なり。未だ亂ならざること一年、兄は王官に宦し、提攜して任を負い、洛を去りて秦に居す。寒きを念うては衣せ、飢を念うては飧わす。疾疹水火の災の身に及ぶ無きは、劬勞閔閔として此の愚庸を保てばなり。年方に紀に及び、凶屯荐及し、兄は讒口に罹り、命を承けて遠く遷されて海隅に窮荒す。（韓昌黎文集第五卷）

この祭文にあるように、三歳で父親の韓仲卿をなくした韓愈の面倒をみつづけたのが、兄の韓會夫妻である。この韓會こそは先の李・蕭・元・獨の文風を韓愈に結びつける重要人物であり、梁肅とならんで、古文運動推進の要石に位置づけうる古文家であった。韓會は未だ出仕しないうちから、江淮の間で友人盧東美・崔造・張正則とともに古の夔皐にあやかって四夔と稱せられるほどに、義道を以って聞えていた。出仕後は起居舍人となり、その道德と文學をもって一世に名を風靡したが、すでにその時には庶族出身の官僚、中書侍郎同平章事の元載の一黨に屬し、その推挽を受けていた。ところが元載は黃門侍郎同平章事の王縉と計って賄路をとる不祥事をおこし、代宗に憎まれて誅に伏することになる。この間の事情は『資治通鑑』に詳しいが、韓會もその一黨であったがために、起居舍人を追われて韶州刺史に貶謫されている。[4] 先に掲げた祭文が「兄は讒口に罹り、命を承けて遠く遷され、海隅に窮荒す」というのがそれである。時に大曆一二年（七七四）で、韓愈は十一歳になったばかりであった。それから三年を經た建中二年に韓會は韶州の地で失意の内に病死する。

各々政治的立場を異にしながらも、互いにその文學をたたえた韓愈と柳宗元の暗默の盟友關係を準備したのも、實はこの韓會であった。というのは、柳宗元の父柳鎮と親交のあった當時の著名な友人のなかに、古文家の梁肅と韓會がいたからである。柳宗元の「先君石表陰先友記」は父柳鎮と交友のあった人物の簡單な傳記を記錄することで、父親を顯彰しようとつとめた文章であるが、そのなかに「韓會は昌黎の人なり。清言を善くし、文章有り。名最も高し。然るに故を以て謗り多く、起居舍郎（舍人の誤り）に至って官を貶されて卒す。弟の愈の文は益々奇なり」と記して、その間の事情を傳えている。

韓會の傳記は新・舊唐書にはない。ところが宋の王銍が「韓會傳」をつくっていて、『新刊五百家注音辯昌黎先生文集』の「韓文類譜」のなかに、これを收めている。それによると、今は傳わっていないけれども、韓會には「文衡」と題する文學論があったとみえ、それをみた王銍は次のように論じている。

文衡の作を觀るに、益々（韓）愈の六經に本づき、皇極を尊び、異端を斥け、百家の美を艾めて自ら時法と爲るを知る。會兄弟の師授は偉なり。

これは韓愈が兄の「文衡」にあらわされた文學理念の影響を深く蒙むって、古文家としての道を踏み出したことを偉大なる師授の關係だと指摘したものである。このように韓會が古文家の思想をもっていたばかりでなく、詩歌にも大變すぐれていたことを知らせる貴重な資料

が『唐國史補』のなかにある。

韓會は名輩と與に號して四夔と爲す。會は夔の頭爲り。歌を善くして妙絶なり。（李肇「唐國史補」巻之下）

中唐期において韓愈が白樂天と並稱せられる詩人であるだけに、この兄弟の師授相傳は詩歌の才能においても顯在化していたとみえる。確かに韓會・韓愈兄弟の運命には明暗の差があまりにはっきりしているが、兄によって播かれた文學理念の種子は確實に弟の意識のなかに培養されて芽をふき、やがて光輝ある文學革命の金字塔として實を結ぶ。

韓會の交友關係は實に廣い。然もそのおおむねが古文家であったことは特筆すべきである。彼にこのような古文家との交友關係と古文家としての自覺をもたらしたものに、胡應麟が蕭穎士とともに古文改革の功勞者にあげた李華の思想的、文學的な影響があったことを忘れてはならない。

李華は士類を奬愛し、名に隨って重んず。獨孤及・韓雲卿・韓會・李紓・柳識・崔祐甫・皇甫冉・謝良弼・朱巨川の若きは後に執政顯官と爲る。（唐書巻二〇二李華傳）

ここに出現している韓雲卿は韓會・韓愈の叔父である。おそらくはこの叔父の推挽があって韓會は若くして李華の文學集團の一員になったと思われる。獨孤及・柳識・李紓・皇甫冉などいずれ劣らぬ古文家が李華の傘下にひしめいていた。韓會の政治的命運を支配したものは元載であったが、彼に古文家としての文學的、思想的な自覺を促したものはこの李華であった。當面人脈關係の側面のみに留意するとすれば、後に韓愈が若き日に親交を結んだ古文家の李觀は李華の甥にあたり、この親交も李華と韓會との人脈關係が準備したものであった。韓愈が夭折した李觀のために「李元賓墓銘」と題する著名な銘文を刻することになったのはすでに周知の事柄である。[5]

驚くべきことに、この韓會の古文家としての交友關係は唯單に李華の文學集團の範圍にとどまっていない。そこに韓會が若くして李華の文學集團に參加した特異な位置と彼みずからの非凡な才質を讀むことができるであろう。唐書蕭穎士傳に附されているその子の蕭存の傳は次のように記している。

子の存は字を伯識、亮直にして父風有り。文辭を能くす。韓會・沈既濟・梁肅・徐岱と善し。――韓愈少くして存の知る所となる。（唐書巻二〇二蕭存傳）

韓會は蕭存をとおして沈既濟・梁肅・徐岱との交友を廣めていったであろうことをこの資料は知らせている。なかでも沈既濟は「枕中記」を書いた唐代傳奇小說の作者として著名である。當時は傳奇作家としてよりも、大變すぐれた史才の持主とみなされていた。[6] 古文運動と傳奇小說の密接な關係が論じられる根據の一つがこのような人脈關係のなかにすでにあらわれていたことは注意すべきである。

沈既濟とともに登場する梁肅が著名な古文家であり、韓會と並んで古文改革運動の要石となる推動者であったことはすでに觸れた。柳宗元の「先友記」は「梁肅は安定の人なり。最も能く文を爲る。補闕修史を以って皇太子に侍す。卒して禮部郎中を贈らる」と記して、柳宗元の父柳鎭の知友であったことを知らせている。然も唐書文藝傳の中にある蘇源明傳をみると、この梁肅が元結と一緒に蘇源明の知遇をえていた事實が別にある。

源明は雅に杜甫・鄭虔を善しとし、其の最も稱する者は元結・梁肅なり。肅は敬之と字し、一に寅中と字す。建中の初め文辭清麗

科に中り、太子校書郎となる。（唐書卷二〇二蘇源明傳付梁肅傳）

蘇源明は天寶の動亂期に肅宗の卽位するや、それを補佐して信頼の厚かった高名な文人官僚である。杜甫を拾遺に推擧し、亂のために隱栖していた元結を呼び寄せ、肅宗に獻策をおこなわせるなど、この二人に官僚としての活躍の場を提供したのもこの蘇源明であった。梁肅はこの蘇源明を通じて古文家元結の存在を知り、その影響をなんらかのかたちで受けた筈である。

梁肅・韓會の知友蕭存の父蕭穎士はまた李華の親友であり、すでに開元期に詩賦家としてたがいに名を競った間柄であった事情については『唐國史補』に詳しい。今は蕭穎士の傳記をみることで、李華との親密な交友の一端を窺い、古文改革の開拓者としての蕭穎士の座標を考えてみることにしたい。

穎士は人の善きを聞くを樂しみ、後進を推引するを以て己が任と爲す。李陽・李幼卿・皇甫冉・陸謂等數十人の如きは、奬目に由って皆名士と爲れり。天下に知人を推せば・蕭功曹を稱う。嘗つて元德秀に兄事して、殷寅・顏眞卿・柳芳・李華・邵軫・趙曄を友とす。時人語って曰く。殷・顏・柳・李・蕭・邵・趙は能く其の交友を全うすと。與に遊ぶ所の者は孔至・賈至・源行恭・張存略・族弟の李遐・劉穎・韓拯・陳晉・孫益・韋建・韋收なり。獨り華は名を齊しうして、世に蕭李と稱せらる。（唐書卷二〇二蕭穎士傳）

蕭穎士・李華の共通の友人に顏眞卿がいるというのは興味深い。彼は中國書道史の上でこの時期復古的な書風を唱えて、當時の書體に革新の氣風をもたらした書家である。藝術のなかの書と散文のジャンルを超えて、顏眞卿が復古の方法によって革新をめざしたのは古文家としての思想的基盤を彼もまた共有していたからであろう。

その盟友蕭穎士もまた李華同様に後進を推奬することを己が任とした人物であった。かかる人物の下に參集し形成された文學集團が存在して、はじめて古文改革が運動としての機能を始動するのである。とりわけ蕭穎士傳で注目すべきは、李華の文學集團に屬していた皇甫冉が蕭穎士の推擧を得た人材として登場していることである。皇甫冉の傳記は新唐書一二七卷にあるが、それによると「字は茂政・十歲にして能く文を屬り、張九齡は之を歎異す。弟の曾と皆に詩を善くす」とある。この皇甫冉を通してみるならば、李華と蕭穎士の文學集團に參加した文學者は交互に出入があり、かなり密接な連絡があったと思われる。李華の傘下にあった韓會が、蕭穎士の子の蕭存と知友であったことも、その間の事情を裏づけるものである。

蕭穎士傳の記述のなかで、もう一つ見落してならない人物がいる。それは蕭穎士が兄事した元德秀である。元結はこの元德秀の族弟にあたり、古文家としての元結の思想的敎養を涵養し、その比興風諫の詩的な精神の風土を用意した人物であるが、唐代古文運動形成過程のなかで元德秀を位置づけるとすれば、そのことのみにとどまらない。唐代古文の始動期に古文家として極めて重要な役割を擔なった蘇源明、さらに李華・蕭穎士・顏眞卿等がひとしく敬慕して止まなかった盛唐期の賢者こそが元德秀であったからである。

ここで改めて、唐代古文運動の人脈による形成過程を整理すると、元德秀を頂點に李華・蕭穎士・蘇源明の下に參集した各々の文學集團の中から、賈至・顏眞卿・元結・獨孤及・柳識・皇甫冉等のすぐれた古文家が多數輩出している。これを第一次古文家集團と呼ぶならば、この第一次集團の中から、安史の亂後の戰後世代ともいえる韓會・梁肅・沈既濟・蕭存が新しい文人官僚となって登場し、相互の人脈のな

かで第二次古文家集團を形成。始動期の古文改革の思想を繼承して、一層强力な運動を展開している。さらに第二次文學集團の韓會・梁肅・蕭存の人脈を媒介として韓愈・柳宗元が出現し、彼等が形成した第三次古文家集團によって、唐代の古文運動はようやくにしてその完成期を迎えることになる。

三

古文運動の始動期に活躍した蕭穎士・李華・顏眞卿・蘇源明はいずれも天寶安史の亂に遭遇し、あまりめぐまれた運命にあったとはいえない。そのなかにあって彼等が精神的な生きがいとしたのは元德秀であった。駢文がなお强い意識拘束力をもっていた時代、不幸な戰亂體驗に醜弄されながら、ややもすれば挫折にむかいかねない古文改革の思想を、始動期の主要な古文家達が持續し貫ぬくことができたのは、青春期に出逢った元德秀が精神的支柱となって絕えず彼等の志をささえ、はげましてきたからであった。

元德秀の傳は舊唐書一九〇卷、新唐書一九四卷にある。その字は紫芝、河南省河南縣の人で、少くして父をなくした德秀は母に仕えて孝であり、その性格も「質厚にして緣飾少し」と傳えている。その族弟元結の傳記をみると、「後魏常山王遵の十五代の孫」(唐書卷一四二元結傳)とあるので、北方異族の高貴な血がこの二人にながれていた。進士科に及第した元德秀は母の喪に服さねばならぬ不幸に見舞われるが、喪があけると、南和の尉となり、その惠政が黜陟使に達して龍武軍錄事參軍に拔擢されている。その後家計の不如意から自ら求めて魯山の令となる。その當時の逸話が二つばかり史書に記されている。一つの逸話はこうである。魯山の地方で虎が暴れて人民に危害を加えていた。そのことを獄中で聽いた或る盜人が自分が格鬪して虎を退治することで、罪を贖いたいと申出た。役人は盜人の詭計で逃亡するつもりだと考えてそれに應じようとしなかった。魯山の長官元德秀は獨りこれを信じ、獄中より解放し、全ての責仕を負うことにした。盜人は虎を退治して約束通り獄に還ってきたので、縣人はあげて人を信ずることの厚い德秀を嘆賞したという。他の一つの逸話は『新唐書』元德秀傳の記事をそのまま傳えることにしよう。

玄宗東都に在り。五樓鳳下に酺み、三百里の縣令・刺史に命じて各々聲樂を以て集わしむ。是の時頗る言うに、帝且に勝負を第し、賞黜を加えんとすと。河南太守は優伎數百を輦にのせ、錦繡を被せ、或は犀象を作せば、瓌譎光麗たり。德秀は惟樂工數十人をして袂を聯ね、于蔿を歌わしむのみ。于蔿とは德秀の爲る所の歌なり。帝聞きて之を異しむ。嘆じて曰く。賢者の言かなと。宰相に謂いて曰く。河南の人は塗炭ならんと。乃ち太守を黜く。德秀は益々名を知らる。(新唐書卷一九四元德秀傳)

この記事は『資治通鑑』二一三卷にも記載されている。余程印象ぶかい事件であったのであろう。通鑑では河南の太守は懷州の刺史となっているが、ほぼ同內容の話である。通鑑によると開元二三載のこととしているので、元德秀が三九歲の出來事であったことがわかる。

この開元二三載という年こそ、李華・蕭穎士・顏眞卿・趙曄などの古文家たちがこぞって進士科に及第した年であった。新唐書孫逖傳をみると、孫逖は「考員外郎に改まり、顏眞卿・李華・蕭穎士・趙曄等皆海內の名有る士を取る。俄かに中書舍人に遷る」とある。これを『唐書』蕭穎士傳に照應すると、「開元二三年進士に擧げられ、對策第一なり」とあるので、彼等がこの年に進士科に及第したことは間違

いない。然も此の進士及第者が大擧して元德秀に兄事、門弟子と號したというのは尋常なことではない。時期的にみても、世に喧傳された玄宗の賞黜事件が彼等の若い純一なる心をとらえた結果であろう。

魯山の令を辭した元德秀は俸祿をことごとく孤獨な人々にわかちあたえ、その簞笥には一縑の絹をのこすのみであったという。かくて隱栖したのちは、陸渾の美しい山水を愛で、酒を樂しみ陶然として琴を彈じ、人々が酒を持ち來たれば、賢鄙を問わず酣飲した。德秀がなくなった時には、彼の身邊には枕と履と一箇の瓢簞をあますだけであったと傳えている。元結は德秀の死を悲しみ、その高潔な人柄を次のように回想している。

六十年生きて、未だ嘗つて女色を識り錦繡を視ず。未だ嘗つて足ることを求めず。苟辭佚色無し。未だ嘗つて十畝の地、十尺の舍、十歲の僮有らず。未だ嘗つて布帛を完えて衣、五味を具えて飡わず。吾の之を哀しむは荒淫・貪佞・綺紈・膏粱の徒を戒しむる以なり。（新唐書卷一九四元德秀傳）

無所有に徹して六十年の生涯を閉じた人間の死を哀しむのは、それでもって荒淫貪佞で衣食に贅を盡す人間たちを戒しめたいからだという元結の發言は痛烈である。

元德秀が卒したのは天寶十三載、安祿山の亂はその翌年に勃發している。亂に遭わずに他界した元德秀は幸せであったが、彼を慕った李華・蕭穎士・顏眞卿・柳識・元結などは亂に捲込まれ、各々の生きざまのなかで不幸な戰亂體驗をもつことになる。それだけに嘗つて彼等が元德秀の人柄とその思想から受けた清烈な印象はより確乎不拔なものとなり、時には暗雲のなかにきざした一條の光のように戰亂で冷えきった心を溫め、砂漠の中の泉のように、戰亂で渴いた心を濕したのである。蘇源明が「吾不幸にして衰俗に生まる。耻じざる所の者は元紫芝を識ることなり」（新唐書卷一九四元德秀傳）と語っているのは、元德秀との出逢いを戰亂のなかでいかに大事に溫めていたかを卒直に物語っている。李華もまた元德秀について、僚友蕭穎士・劉迅をなくした後に、獨り殘された我が身を嘆ちながら、三人の人柄をしのんで「三賢論」を著している。そのなかで、「德秀の志行は當に道を以て天下を紀し、迅の志行は六經を以て人心を諧え、穎士の志行は中古を以て今の世を易うべし」（全唐文卷三一五）と語っているが、この三人の志行はそのまま唐代古文運動をささえた思想的原理につながってゆくものがある。唐代の古文運動はこの元德秀に兄事して敬慕の念をもちつづけた李華・蕭穎士・蘇源明・顏眞卿・元結によって、意識的な歩みがはじめられたのである。その意味で元德秀の存在が古文改革の思想に與えた影響力は甚大であったといわねばならない。

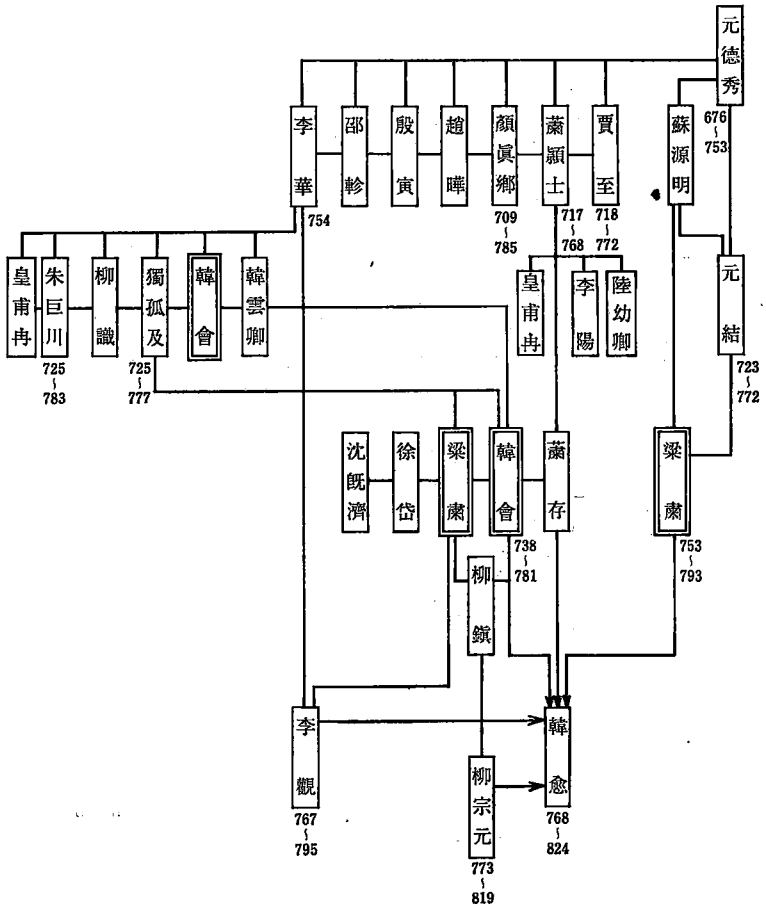
四

ここで別表に掲げた唐代古文運動形成過程の人脈圖をみてみることにする。先に述べたように人脈圖に出てくる古文家群像は世代別にほぼ第一次古文家集團・第二次古文家集團・第三次古文家集團の三つに區分することができる。その區分の目安としたのは安史の亂である。天寶十四載（七五四）亂勃發期を軸にすえて考えてみると、蕭穎士が三九歲、元結が三三歲、獨孤及が三一歲であり、韓會・梁肅になると、各々十五歲と二歲の時となる。したがって元結・獨孤及ラインの上に位置する古文家は三十歲以上の壯年期にもろに安史の亂に捲込まれ戰亂體驗をつぶさになめた共有世代といえる。これを第一次古文家集團とみるのである。この第一次古文家集團に屬した蕭穎士・李華・顏眞

卿・獨孤及・元結などの安史の亂體驗は彼等の傳記からみるかぎり、實にさまざまである。

刺史として賦兵討伐に赫々たる武功をたてた顏眞卿。肅宗の下で考功員中知制誥の役職について、安史の亂との對應のなかで適切な諫言をおこない、元結など有能な人材を集めて力あった蘇源明。いちはやく「胡人寵を負う、驕亂久しからず」と、安祿山の反亂を豫見し、亂發生後も河南の採訪使郭納・山南節度使源洧などに戰略謀議を進言した蕭穎士(7)などいずれも、古文家にふさわしく亂の現實を避けることなく、積極的にそれとかかわっている。

唐代古文運動形成過程人脈圖



彼等三人にくらべて、極めて不幸な安史の亂體驗をもったのは李華である。天寶十二載、監察御史に任ぜられた李華は時の宰相楊國忠が支配する在所において横暴狡猾であることを察知し、彈劾を加えてゆるめなかった。ために州縣の役人は皆肅然と襟を正したが、楊國忠のにくむところとなり、右補闕に左遷されている。やがて安祿山の亂がおこると、李華は誅守の策計を上奏したが、一向に手應えなく、そのうちに玄宗は蜀に逃れて百官は解體した。その時母親を鄴にのこしていた李華は騷亂の巷をぬってこれを救出し、輦にのせて逃れてゆく途中、安祿山の賊盜にとりおさえられ、鳳閣舍人の役職につけられてしまった。亂平定とともに、僞署についた罪を問われて杭州司戸參軍におとしめられている。これ以來、李華は亂にあって節を完うできなかったこと、そのために親を安んずることができなかったことを生涯の傷みとした。母の死後、江南に隱居した李華は上元年間に左補闕司府員外郎に召されたが、「烏(いずく)んぞ節

を躁し親を危くして、天子の寵を欲せんや」と述べ、病を理由に出仕を固辭している。後に李峴の推擧をことわりきれずに、檢校吏部員外郎の職についたが、間もなく中風に苦しみ、山陽に隱れて子弟と農耕に窮稿し、晩年は佛につかえてその悲劇的生涯を閉じている。確に安史の亂體驗は李華に消しがたい悲劇的烙印をおすことになったが、古文家としての李華の意識と文體は、この亂體驗を境にして一層鋭くとぎすまされている。第一次古文家集團のなかで、特に李華固有の安史の亂體驗をとりあげて、詳しくふれてきたのは、その運命の悲劇性の强烈さによるばかりではない。實は他の第一次古文家集團の古文家にくらべて、安史の亂體驗と古文の相關々係を知るてがかりになる資料を、この李華と他の一つは元結の場合に發見できるからである。

李華の詩文は四庫全書別集に『李遐叔文集』として收められている。そのなかに「贈禮部尚書清河孝公崔沔集序」と題する一文がある。その文中に「公は六經を援き、百氏を伸し、時事を覆い、其の中に擧ぐれば、天下のひとびと焉を諷誦せざるは莫し。文集は亂離を經て、散逸多し。今存する者二十九卷」と記す所からみて、これは亂後にかかれた序文である。然も冒頭から古文家の文學觀が濃厚に出ており、李華が亂後にどのような道統意識をもって、散文とかかわっていたかを頗る鮮明に示している。

文章は作者（詩經の詩人）に本づき、而して哀樂は時に繫わる。作者に本づくは六經の志なり。時に繫わるは文（王）・武（王）を樂しみ、幽（王）・厲（王）を哀しむなり。立身揚名は國に有り家に有り。化人成俗は安危存亡なり。是に於て之を觀れば、志を宣ぶるを言と曰い、飾りて之を成すを文と曰う。有德の文は信なり、無德の文は詐なり。皐陶の歌、史克の頌は信なり。子朝の

告、宰嚭の詞は詐なり。而して君子は之を恥ず。夫子の文章は偃・商焉を傳え、偃・商歿して孔伋・孟軻作る。蓋し六經の遺なり。屈平宋玉哀しみ傷みてより、靡として返らず。六經の道遯る。論の後世に及べば、力足る者は之を知る能わず。之を知る者は力の或は足らざれば、則ち文義は寖れて以て微かなり。文は行を顧み、行は文を顧みるは、此れ其の古に與する歟。

屈原・宋玉の文學出現以來、衰退の一路をたどった六經の道を再興し、時代とふかくかかわってゆく有德の文の必要性を說く李華の文學觀は頗る古直である。かく內容が古直であるばかりでなく、文體のリズムも又古直である。先に引用した序文の原文を一部引いて、その古直な文體のリズムをたどってみよう。

於是乎觀之。宣於志者曰言。飾而成之曰文。有德之文信。無德之文詐。皐陶之歌。史克之頌。信也。子朝之告。宰嚭之詞。詐也。而士君子恥之。夫子文章。偃商傳焉。偃商沒。而孔伋孟軻作。蓋六經之道遯矣。論及後世、力足者不能知之。知之者力或不足。則文義寖以微矣。文顧行。行顧文。此其與於古歟。

この文體はいちおう四言・六言のリズムが基調句を構成しているが、その間に五言三言七言或は二言のリズムが適宜に配置されていて、六朝駢文の臭氣を意識的に拂拭している。例えば、「於是乎觀之」の句は、「於是觀之」でも充分意味は通ずる筈であるが、あえて乎の助字を入れて、四言のリズムをこわしているのは意識的である。逆に、「有德之文信」は「有德之文信也」として六言のリズムに整えるのが常識であろうが、五言句に抑える工夫をしている。又「子朝之告。宰嚭之詞。詐也」の句は四言を重ねているが、その後二字句で締めくくっているのは、古文のリズムを出すのにこころがけたとみるべ

きである。確かに、對句配置は隨所にみられるが、駢文脈の美的對句の構成法ははじめから放棄されている。重層的對句のなかに、故事を象眼して譬喩的な暗示で含蓄のある文意を傳達する駢文の工夫は、ここでは完全に無視されている。

李華の散文を平典を尙ぶとみた胡應麟の批評はその意味で適確である。この序文の古直で平典な文體のリズムは李華の古文を知る恰好な資料でもある。

李華が安史の亂以前の開元大寶期に蕭穎士と文名を競ったときに書いた「弔古戰場文」は『古文眞寶』などに採錄するが、その厭戰的な內容とともに人口に膾炙し名文である。「鼓衰兮力竭。矢盡兮弦絕。白刃交兮寶刀折。兩軍蹙兮生死決。――鳥無聲兮山寂々。夜正長兮風淅々。魂魄結兮天沈々。鬼神聚兮雲冥々」といった具合の文體で、無意味の助字「兮」を除けば、四・六言のリズムで諧調し、殆どが對句の構成をとっている。その間擬態語、擬聲語を繁用し、各所に換韻するなど、ここにみるかぎり、駢文家としての李華の面目は躍如たるものがある。[8] ところが安史の亂後に書かれた彼の散文に、この駢文家の面影をさがすことはむしろ困難である。駢文の文體は意識的に扼殺されている。つまり李華は安史の亂のにがい體驗を契起に、儒教的道統の繼承を一層深く自覺するようになり、己の內なる駢文脈の思考と訣別し、知識人の社會的責任を文體改革の問題として問いかけることができたのである。

元結における安史の亂體驗と古文の相關々係はどうであろうか。亂發生時、彼は三十一歲になっており、すでに進士合格の資格を得ていたが、猗玕洞に難をのがれた。間もなくして蘇源明の推擧により肅宗の下に召出されている。乾元二年李先弼が史思明の軍を河陽でこばんでいる時、肅宗は河東に都を移そうと考えた。下問に答えて元結は「時議」三篇を書いて獻策した。これをみて肅宗は「卿果して朕が憂いを破る」と喜び、元結の獻策を入れて遷都をとどまっている。この功により、元結は金吾兵曹參軍に拔擢され、ついで監察御史に遷っている。唐・鄧・汝・蔡の諸州から義勇軍をあつめて、劇賊五千を降したり、史思明叛亂軍の南方侵入を喰い止めるなど實にめざましい活躍振りをみせて、その後水部員外郎兼殿中侍御史に進んでいる。

元結が沈千運など七人の詩人の詩二十二首をとりあげて、『篋中集』と題する詞華集を編んだのは乾元二年（七五九）、安史の亂の最中のことである。

> 吳興の沈千運は獨り流俗に挺んで、强いて已に溺るるの後を攘い、窮者として惑わざること五十餘年、凡そ爲る所の文皆時と異なる。故に朋友・后生に師効せられ、能く類似する者五六人有り。於戲、沈公自り二三子に及ぶは、皆正直を以て祿位無く、皆忠信を以て貧賤を久しうす。皆仁讓を以て喪亡に至る。是に異る者は當世に顯榮すれば、誰か士の爲に辯ぜん。吾は之を天下に聞かしめんと欲す。兵興り今に於て六歲。人皆武に務むれば、斯れ焉に誰か嗣がん。已に長逝する者の遺文は散失し、方に阻絕する者は近作を見ず。篋中を盡して存する所、總て之を編次し、命じて「篋中集」と曰う。今に於て凡そ七人詩二十二首、時に乾元二年なり。（唐元次山文集卷七四部双刊初編所收）

元結が沈千運等の詩を編集し、その古振りな詩風を後世に傳達しようとしたのは、そこに詩經の風雅の詩精神を發見したからである。彼らの殆んどは、無名のままに埋沒する詩人群である。それを掘りおこした元結に卽して云うならば、武闘にあけ暮れる安史の亂の荒廢した

精神の危機狀況のなかでこそ、中國に於ける傳統的な詩の姿と心を、時勢と背馳した不遇窮老の詩人のなかに確認する必要にせまられていたのである。

元結は晩年、正確に云えば大曆二年に、彼の文集を編纂しているが、その際に著した「文編序」をみると、安史の亂體驗以前とそれ以後とでは、自分の文章の內容・文脈の兩面にわたって差異が認めなれるという發言をおこなっている。卽ち天寶十二年進士に及第した當時の舊文章は「林壑に優游し、當世に怏恨す。是を以て爲る所の文は戒むべく、勸むべく、安ずべく、順ずべき」ものであったが、「爾來十五年、更に喪亂を經た」後の「爲る所の文は退讓する者多く、激發する者多く、嗟恨する者多く、傷閔する者多し。其の意は必ず之に忠孝を勸め、誘うに仁惠を以てし、公直に急にして、其の節分を守る。此の如きは時を救い俗に勸むるの須むる所にあらざる歟」と語っている。

これは、喪亂體驗を經た後、一層强固になった儒敎の倫理的使命觀が元結の文章の文脈と思想內容に決定的な變化をもたらした事情をあきらかにするものである。これまた安史の亂體驗が古文家に與えた影響の痕跡を考える上で、まことに興味ある資料といえるであろう。

五

最後に、古文運動形成過程において第一次第二次の文學集團に屬した文學者群の思想が、唐代古文完成者である韓愈の思想形成にいかなる役割を果し、それが韓愈のなかに影響を與えていかに集大成されていったかに焦點をあわせ、その實情を追跡することにする。

韓愈の文學思想の根底には、正統儒敎の思想を繼承する者が自分であるとする明確な意識がある。韓愈の「原道」をみると、堯舜以來の原始儒敎の道統は孔子から孟子まで傳承されてきたものの、それ以後は斷絕したとみるのが、正統儒敎の道統思想にたいする認識である。

斯れ吾が謂う所の道は向に謂う老佛の道に非ず。堯は是を以てこれを舜に傳え、舜は是を以てこれを禹に傳え、禹は是を以てこれを文・武・周公に傳え、文・武・周公はこれを孔子に傳え、孔子はこれを孟軻に傳う。孟軻の死してその道を得ず。（韓昌黎文集第一卷）

更に韓愈は「送王秀才序」においても　儒敎の道統の傳承段階にやや詳細な解說をあたえて次のように云う。

孟軻は子思を師とす。子思の學は蓋し曾子に出ず。孔子沒してより群弟子の書有らざる莫きも、獨り孟軻氏のみ其の宗たるを得たり。（韓昌黎文集第四卷）

孟子まで傳えられてきた原始儒敎の道統が秦漢以降焚書坑儒の厄に遭い、老佛の思想がはびこって斷絕したとみる韓愈は、それを唐代において再興する使命觀を自らに課した。

しかしながら、かかる孟子以後儒敎の道統が廢絕したという見方は、六經の思想を骨格にすえた孔子の文章が、子游・子夏を經て子思から孟子まで傳わってきたが、屈原・宋玉の辭賦文學が出現して以來、その文章の道統がすっかり隱れてしまったとする李華の文章史觀（贈禮部尙書淸河孝公崔沔序）のなかに、すでに顯在していたものである。韓愈と李華の違いは、道統の思想と道統の文章の差である。孔子から孟子に至るまでの傳承者が一方は曾子となっているが、他方では子游・子夏に入れ替っているのは、そのためであった。

蕭穎士が唐代においていかに個性的な歷史觀を抱いていた人物であ

ったかということについては、平岡武夫氏に「史官の意識と古典主義の文學――蕭穎士の場合」と題するすぐれた論攷がある。[9] それによると、「續尚書」を書いた王通と相通ずる點があるが、又非常に重要な相異點がある。相通ずる點は司馬遷・班固の歴史敍述の形式に反對し、尚書の形式に範をとり、孔子がきめた王者の道を敍述するにふさわしい形式をとったことである。相異する點は、王通の場合六經にならって孔子の精神と形式を繼承することに歴史意識の重點がおかれていたが、蕭穎士は孔子よりなお古くさかのぼって、左史・右史の史官の存在を強く意識し、史官としてあるべき姿を原理的に把握していたことにあるとみている。

古は左史が事を記し、右史が言を紀す。事を記す者は春秋經、言を紀す者は尚書是れなり。周の德既に衰え、史官は宗を失う。孔聖は唐虞（堯舜）以下を斷ちて帝王の書を刪り、魯の史記に因って春秋を作り、微詞に託して以て褒貶を示す。――有漢の興りて舊章頓かに革まり、馬遷は其の始めを唱え、班固は其の風を揚げ、紀と傳を平分し、表と志を區分す。其の文は複にして雜なり。其の體は漫にして疏なり。事は擧措を同じうし、言は卷帙を殊にす。首尾以て網羅を振るうに足らず。支條适かにて以て繁亂を助くるに足る。是において、聖明の筆は削られ、褒貶の文は廢れたり。（全唐文卷三二三贈韋司業）

ここで、蕭穎士は春秋・尚書の敍述と形式にこそ、歴史官としての正統な意識と敍述のスタイルがあったが、司馬遷の史記・班固の漢書が出現して紀傳體をとったために、その後の史書が、紀と傳・表と志がばらばらに記述されて歴史としての全體的な統一性を缺き、筆誅褒貶の史官意識と首尾一貫した史書としての文章樣式がなくなってしまったと慨嘆している。

この文章につづいて、彼は魯の編年體にならって歴代の通史を書きたいと述べ、左氏傳から文章のよさを、穀梁傳からは簡約さを、公羊傳から的確さを汲みとり、司馬遷・班固を追放して、孔子や左丘明を復興したいと語っている。ここには、李華の文章道統說と軌を一にして、所謂正しい歴史書の道統が廢絶したとみる史官の意識が、原理的な批判としてあらわれているとみることができる。

おそらくはこの李・蕭の影響下にあってのことであろう、韓愈の兄韓會に思想・文章・歴史記述の三者が原始儒敎の正しい道統から離脱してしまった時點と原因を簡潔におさえている論述がある。

其の始めを論ずれば、則ち經制の道は老莊之を離し、比諷の文は屈宋之を離し、記述の體は班固之を離す。（新刊五百家註音辯昌黎先生文集附韓文類譜第八・王銍撰韓會傳引・韓會撰文衡）

「經制の道は老莊之を離す」という論旨はただちに韓愈の思想史觀につながり、「比諷の文は屈宋之を離す」とは李華の文章史觀に、「記述の體は班固之を離す」とは蕭穎士の歴史觀に類似し、それを繼承する發言である。

今更ことわるまでもなく、正統儒敎思想の道統は韓愈に始まるものではなく、すでに第一次古文家集團の李華・蕭穎士に、更に第二次古文家集團の韓會に明確な意識として存在しており、その影響をうけて大膽な原始儒敎の道統說を表明したのが韓愈であったといえる。

韓愈は後世の文學史家が云うように、貫道主義・載道主義の概念で自分の文學を語ったことはない。韓愈の文學を貫道主義・載道主義と呼稱したのは李漢であり、蔣之翹である。それについては拙論「韓愈における發憤著書の說」で言及しているのでそれにゆずる。しかしなが

ら、韓愈は「題歐陽生哀辭後」のなかで、「愈の古文を爲るは豈に獨り其の句讀の今に類せざる者を取るのみならんや。古人を思いて見るを得ざれば、古道を學んで則ち兼ねて其の辭に通ぜんと欲す。其の辭に通ずる者は本もと古道に志す者なり」（韓昌黎文集第五卷）と語っていることや、「答李秀才書」で「愈の古に志す所は惟其の辭を好むのみならず、其の道を好めばなり」（韓昌黎文集第三卷）と云っていることなどを思い合せてみて、このような考え方を載道文學說とみなすならば、これも又、李華や梁肅・韓會などの古文家たちの文學觀に、それに近接した論述を發見することができる。

李華の場合は、文章は六經の志を汲み、時代の哀しみや樂しみと積極的にかかわってゆくものでなければならなかった。そのことを語った「贈禮部尙書清河孝公崔沔書」のなかで、「有德の文は信なり、無德の文は詐なり」と云い切っているのも、載道主義文學觀の表明であった。

「常州刺史獨孤及集後序」をのこした梁肅は獨孤及の文章をほめたたえて、道と文の關係を次のように論じている。

道德仁義は文に非ざれば明かならず。禮樂刑政は文に非ざれば立たず。文の興廢に世の治亂を視、文の高下に才の厚薄を視る。唐興りて前代澆醨の後を接ぎ、文章顚墜の運を承く。王風下扇し、舊俗稍革まる。――天寶中、作者數人之（文）を禮に節す。公は之を作るに汨んで、是に於て道德を操りて根本と爲し、禮樂を總べて冠帶と爲し、易の精義、詩の雅興、春秋の褒貶を以て之を辭に屬る。（全唐文五一八卷）

これは、時代の狀況とその中での人間の精神生活がいちばん先に反映するものが文章であるという發想にたつ梁肅が、唐の天寶年間になって、六朝以來墮落した文章道を再興した數人の古文家の存在に言及し、なかでもとりわけ道德を根本にすえ、禮樂で裝身し、易の精義・詩の雅興・春秋の褒貶を生かした獨孤及の散文を絕贊したものである。そこにまぎれもなく、梁肅の載道主義的な文學說が開陳されている。

韓會になると、載道文學說はより生硬な論理で、文章の本質は敎化勸戒にあるとみている。

君爲り、臣爲り、父爲り、子爲るは俾しく皆經に有り。道德仁義禮智信を辨じ、以て其の情を管どり、以て其の性に復すは、此れ文の由って作る所なり。故に文の大いなる者は三才を統べ、萬物を理め、其の次に損益を敍べ、敎化を助け、其の次に善惡を原ね、勸戒を備う。伏羲に始まり、孔門を盡すは、斯の道に從えばなり。（前揭・王銍韓會傳引文衡）

ここにも頗る偏向性に富む載道文學說がある。韓愈が古代の文章に寄せる切實な關心は道と文の不可分な相關性にあったが、その思想的背景に、これまでのべてきた李華・梁肅・韓會の先驅的な載道文學觀があったことを見逃すわけにはいかない。

六

古代聖人の思想が表白されてあるのは經典であり、その經典の祖述に熱心であり、忠實であったのは、兩漢時代の學問であった。韓愈が「答李翊書」のなかで「三代兩漢の書にあらざれば、敢て見ず。聖人の志にあらざれば、敢て存せず」（韓昌黎文集第三卷）と斷言したのは原始儒敎の純一な道に回歸し、それを再興する方法は、經書の學習以外にないと見定めてのことである。

經書の學習に專心するという考え方は、前期古文家の發言のなかに、やはり濃厚なかたちで顯在している。蕭穎士の「贈韋司業」もその顯著な一例である。

僕は有識以來、嗜好寡し。經術の外は略心に嬰らず。幼年小學に方るの時、論語尙書を受く。未だ究解精微する能わずと雖も、說に依るは今と異ならず。是に由りて心開け意に適わば日々千餘言を誦す。（全唐文卷三二三）

ものごころがついて以來、今日まで經術のほかには心にかけなかったし、「心開け意に適う」論語尙書の千餘言を今でも日々朗誦するという蕭穎士の發言は、韓愈が「答李翊書」でみせた斷言にくらべると極く自然である。日常慣習のなかに經書の受容が自然にゆきわたっていて、それが生活のリズムとなっているからであろう。

「質文論」を書いた李華になると、考試・仕官する者にむかって、五經の他には、それを輔佐する左氏・國語・爾雅・荀子・孟子と實用に役立つ藥石の學を習學すれば、その他は學ぶ必要はないと云っている。

始めに經史を學習すべし。左史・國語・爾雅・荀・孟等の家は五經を輔佐する者なり。藥石の方の天下に行わるるに及べば、考試仕進する者宜しく之を用うべし。其の餘百家の說・纖緯の書は存するも用いず。喪制の縟・祭禮の繁の備に擧げざる者は以て之を省け。（文苑英華卷七四一）

諸子百家・纖緯の書を廢用せよと云いながら、そのなかから荀子孟子を除外し、經書の學習のなかから繁縟な禮制を締め出す李華には、經書の道統を踏むもの、その規範とすべきものについてのより嚴密な撰擇が意識されていたとみえる。

古文家にとって必須條件とみなされていた經書の學習とは對蹠的に、徹底して否定の對象になったのは六朝の駢文である。韓愈の文學思想の根底には、佛老の隆盛をうけて儒敎が逼息し不純になる思想の狀況が六朝時代にあり、その思想の狀況を反映したのが駢驪文の文體であるという認識があった。「送孟東野序」で、漢代のすぐれた文章家として司馬遷・相如・劉向・揚雄をあげているけれども、こと魏晉六朝時代の文學になると、たとえそのなかに立派な作品があったとしても、「その聲は輕にして浮なり。その節は數にして急なり。その辭は淫にして哀なり。その志は弛にして肆なり」（韓昌黎文集第四卷）と論評するにとどまっている。この論評は駢文的要素の强い詩文の本質をあげて、六朝文學の總體を蔽うものとして否定しさろうとしたもので、老佛の思想に傾むき、儒敎の志が弛緩した六朝文學にむけての文體論的否定であった。

この六朝文學批判の聲が韓柳に先驅して新しい文體改革の必要を感じていた古文家の中にあがっていたことは至極當然のことであった。先ず蕭穎士であるが、彼は、「贈韋司業」のなかで、「僕は平生文を屬するに、格は俗風に近からず。擬議する所は必ず古人を希うなり。魏晉以來は、未だ嘗つて意に留めず」（全唐文卷三二三）と語り、魏晉六朝とその餘風をうけた初唐までの文學を、自分の文章工夫の對象外においていたことをあきらかにしている。然しながら、蕭穎士の沒後、その子の蕭存の依賴を受けて、李華が著した「楊州功曹蕭穎士文集序」をみると、穎士が抱いていた文學史觀について次のように語っている。

君（穎士）以爲く。六經の後に屈原・宋玉有り。文甚だ雄壯にして經むる能わず。厥の後、賈誼有りて文詞最も正しく理體に近

し。枚乘・司馬相如は亦瓌麗の才士なるも、然り而して風雅に近からず。揚雄は意を用うるに頗る深し。班彪は理を識る。張衡は宏曠、曹植は豐贍、王粲は超逸、嵇康は標擧なり。此の外は金相玉質なるも尙ぶ所或いは殊なり、備に擧ぐる能わず。左思の詩賦は雅頌の遺風有り。干寶の論は王化の根源に近し。此の後寥絕して聞ゆる無きも、近日陳拾遺子昂の文體最も正しと。

これからみると、蕭穎士は漢代の文學に非常に高い評價をあたえている。これは韓愈の「送孟東野序」に於ける漢代文學尊重につながる發言である。韓愈と異なるところは、魏晉六朝の文學のなかでも、優良な傳統をきめこまかにおさえ、取捨撰擇している點にある。左思の詩賦に風雅の遺風を認め、干寶の論著が王化の根源に近づいているとする批評はやはり古文家ならではの評價であって、これはあきらかに彼が儒敎的倫理觀の稀薄な駢麗的詩文に批判的立場を貫いていることを知らせるものである。

獨孤及の六朝文學批判となると、その視點は文體批判にむけられている。その點では、六朝文學を總體的に文體批判で否認した韓愈の「送孟東野序」の立場におなじである。

志は言に非ざれば形われず。言は文に非ざれば形われず。是の三者の相に用を爲すは猶川を涉る者の舟檝を假りて後濟るがごとし。典謨缺け雅頌寢れてより、世道陵夷し、文も亦下衰す。故に作者は往々にして文字を先にして比興を後にす。其の風流は蕩として返らざるなり。乃ち其の詞を飾りて其の意を遺す者有るに至れば、則ち潤色愈々工にして其の實愈々喪わる。其の大いに壞れるに及んで、章句を儷偶し、枝をして葉に對して比せしむ。八病四聲を以て楷擧と爲し、拳々として之を守ること法令を奉ずるが如し。（全唐文卷三八八）

章句を儷偶にする六朝の駢文、八病四聲に拘束された六朝の詩風を、文字を先にして比興の精神をなおざりにするものだと、その批判の聲は痛烈である。

韓會になると魏晉六朝の文學だけではなく、漢代の文學から墮落がはじまるとみて、漢魏以還を對象として否定する點では、蕭穎士・韓愈と意見を異にしている。然しながら、その否定の口吻は韓愈のそれに頗る類似していて興味ぶかい。

後の學者は日々に本を離る。或は浮、或は誕、或は僻、或は放。甚しき者は靡を以てし、逾るを以てし、蕩を以てし、溺るるを以てす。其の詞は巧淫、其の音は輕促なり。噫姦を啓き邪を導き、風を流し義を薄んずること、斯に甚しきを爲す。而して漢魏以還は、君は之れ以て臣に命じ、父は之を以て子に命ず。（前揭王銍撰韓會傳引文衡）

韓會が漢魏以還の詩文を「其の詞は巧淫、其の音は輕促」と批判した評語は弟の韓愈にひきつがれ、自己流の文體に溶解させてあるのが「其の聲は輕にして浮なり、その節は數にして急なり、其の辭は淫にして哀なり、其の志は弛にして肆なり」（送孟東野序）という六朝詩文の文體否定の文脈であったことはあきらかである。

この他、韓愈は「答李翊書」「送高閑上人序」及び「國子監助敎河東薛君墓誌銘」において、「氣」を藝術創作論の中核にすえて、藝術の創造には氣力の橫溢こそ重要であると說いているが、これも又、梁肅の「補闕李君前集序」に「氣」をかなめにした文章論があり、それを踏まえたのが韓愈のそれであったことは、すでに拙論「韓愈の文章表現論」で詳說しているので、ここでは省略することにする。

このように、韓愈の文學思想を檢討するとき、かかる前期古文家たちの文學思想の甚大な影響を見逃せない。云換れば、前期古文家の存在なくして、韓愈の存在はなかったといっても過言ではない。唐王朝に潛在していた內部矛盾がいっきに噴き出した安史の亂の危機的情況と相呼應しておこってきた古文家たちの人脈がさまざまなかたちで、すべて韓愈に結節してきたように、彼等が二世代にわたって構築した文學革命の理念と實踐的情熱はさまざまなかたちで、韓愈の文學思想の糧として集約され、唐代古文創造に豐饒なみのりをもたらすことになったのである。

結　語

これまで拙論は、韓愈につながる前驅的古文家の群像とその人脈關係を基軸にしながら、彼等のなかの安史の亂體驗と古文改革との相關々係を論じ、韓愈の文學思想の中核をなすものの原基型が、すでにその人脈を形成してきた古文家たちの文學思想のなかに發見できることをあきらかにしてきた。

然しながら、文體論の面から前驅的古文家の散文脈の質をみてみるとき、韓愈ほどに當時の話ことばにちがい濶達自在な變化と陰影にとむ說得力のある古文創造に達してはいない。依然として四・六言のリズムによる對句表現が繁用されており、駢文の拘束から充分に自由になれないでいる。これはほぼ韓柳以前の古文家の散文に共通する性格である。文體改革の意識が先行して、文體表現がそれに伴わない試行段階特有の現象を呈していたわけである。

そのなかにあって、典故修辭を完全に無視して傳達理解を容易にし、四・六言のリズムを意識的に破るために、七言・五言・三言の句をはさむなど、古文の新しい樣式を模索した苦心の痕跡はあきらかに見てとれる。[11]

前驅的古文家のおおむねは安史の亂前後の政治的要請のなかで官界に登場してきた中小地主層出身の文人官僚であった。それだけに、魏晉以來貴族官僚が獨占してきた駢儷文の美文脈の弊害を實感していた。美文脈の枠組の中に士大夫の意識が閉ざされている限り、貴族官僚が維持してきた舊體(アンシャン・レジーム)制を變革して、新しい現實に對應することは不可能であることを知っていた。それ故に、前期古文家たちは儒敎思想の基本原理を再確認することで、それにともなう現實への參加を文學者の責務とみていたのである。しかも文學それ自體の問題としては、必然的に自らを含めて士大夫の思想の文脈となっていた駢文體を變革する作業に取組まねばならなかったのである。

あらゆる時代の文學運動が具體的な時代の狀況とのかかわりあいのなかで發生し、それを意識的に推進する强力な文學集團の人脈と思想があって、それははじめて運動として機能し、文學革命の達成にちかずいてゆくのである。にもかかわらず、從來唐代古文運動を對象に檢討するとき、具體的な狀況と人脈、或は文學思想との總體的な關係を無視して、類型現象をてがかりに、遠い時代にその源流を求める、いわば博學をてらうこと以外にあまり意味のない研究操作がおこなわれてきた。

例えば、郭紹虞氏は劉勰の『文心雕龍』にまでさかのぼって、唐代古文の源流を求めようとしているが、『文心雕龍』が緊密な四・六の駢儷文を見事に驅使して書かれていることを思えば、たとえ韓愈及びその前驅的古文家のなかに「原道」「宗經」という共通の問題意識があったとしても、その間に決定的な質の違いがあることはもはや自明

の理である。近人錢多父氏は北朝の蘇綽・李諤から盛唐に至るまでの期間を古文の準備期とみる說を出しているが、いずれも上からの政治的な美文否定であり、士大夫の內發的・自覺的な文體改革でなかったことでは、安史の亂の危機的狀況のなかからたちあがった韓柳につながる前期古文家たちの文學意識とは決定的にちがっていた。

拙論が「唐代古文運動の形成過程」と題して、不充分ながらもその實態をあきらかにしてきたのは、かかる無原則的な源流說を批判する必要を感じたからでもあった。（完）

註(1) 陳子昂起源說。(a)其詩文在唐初、蹇首起八代之衰者。韓退之薦士詩、言國朝盛文章子昂始高蹈。非虛語。（陳振孫・直齋書錄解題。卷一六陳拾遺集十卷）

(b)七世紀末武則天在位的時候、一個宏亮的要求文學改革的聲音響起來了。梓州射洪人陳子昂發出了有力的文學革命的信號、他的那篇「與東方左史虬修竹篇序」被認爲是唐代文學革命運動的重要宣言。（錢多夫・唐宋古文運動。二、古文運動的準備期）

(2) 劉勰起源說　(a)劉勰主張原道而開唐代文壇的風氣、顏之推主張典正而開唐代詩壇的風氣。（郭紹虞・中國文學批評史。二四、北朝的文學批評）

(b)其實古文運動不始於韓柳。不但不始於韓柳、說得早一些、也可以說不始於唐代。南朝劉勰・北朝蘇綽都可說已經開了這個氣風。劉勰尤其重要、因爲他是批評家、批評家總有理論、這理論是古文運動的相據。（郭紹虞・中國文學批評史。古文運動）

(3) 蘇綽李諤起源說。羅根澤氏の『中國文學批評史』中卷第六章「早期的古文論」で古文の起源は西魏の末年蘇綽が尙書にならって大誥を制作したにはじまり、それに附和した者が古文の旗幟をかかげたとして彼の古文起源說を提出している。これをうけたのが次の錢多夫氏の說である。西魏文帝大統十年（公元五四四）出現了要求用古文替駢文的先聲。掌握實際政權的宇文泰和蘇綽不滿當時浮艶不實的文風、提唱用古奧商周時代的「尙書」誥命文體代替駢文——過了四十年卽將完成統一事業的隋文帝陽堅也看到了文風問題、當時的文章講究詞句新巧浮華、內容不出吟風詠月。楊堅認爲這種文章不利千一新興王朝統治與建說——有一個李諤進文帝的意志、崇實尙用的觀點出發、上書給隋文帝、嚴厲批評當時公私文章。（錢多父・唐宋古文運動。二、古文運動準備期）

(4) 癸未、貶吏部侍郎楊炎、諫議大夫韓洄・包佶、起居舍人韓會等皆(元)載黨也。炎鳳翔人。載常引文學才望者一人、親厚之、異日欲以代己。故炎及于貶。洄滉之弟、會南陽人也。上初欲盡誅炎等。吳湊諫救百端、始貶官。（資治通鑑卷二二五）

(5) 「李元賓墓誌」（韓昌黎文集第六卷碑誌）。吉川幸次郎氏の『唐代の詩と散文』はこの墓誌銘の文章をとりあげ詳細な分析及び解說を加えている。

(6) 沈旣濟蘇州人。經學該明。吏部侍郎楊炎雅善之　執政薦旣濟有良史才。召拜左拾遺史館修撰。（唐書卷一百三十二沈旣濟傳）

(7) 安祿山寵恣。穎士陰語柳幷曰。胡人負寵而驕亂不久矣。東京其先陷乎、卽託疾、游太室山已。而祿山反。穎士往見、河南採訪使郭納言禦守計、納忽不用。歎曰肉食者以兒戲禦劇賊難矣哉。聞封常淸陳兵東京、往觀之、不宿而還、因藏家書於箕穎間。身走山南節度使源洧、辟掌書記。賊別校攻南陽、洧懼欲退保江陵、穎士說以欲笑取天下。（唐書卷二百二蕭穎士傳）

(8) 最近、李華について論じたものに劉三富氏の「李華の思想と文學」(中國文學論集第四號・濱一衛先生退官記念號）がある。

(9) 平岡武夫氏『經書の傳統』（岩波書店刊）に收載。

(10)・(11) 拙論「韓愈の文章表現論」（九州大學文學部紀要・「文學研究」第七十一輯所收）を參照。梁蕭の文章氣力說は「炎漢制度、以覇王道雜之。故其文亦二。賈生・馬遷・劉向・班固・其文博厚。出於王風者也。救

叔・相如・揚雄・張衡・其文雄富。出於覇塗者也。其後作者、理勝則文薄、文勝則理消。理消則言愈繁、繁則亂矣。文薄則意愈巧、巧則弱矣。故文本於道、失道則博之以氣、氣不足則飾之以辭。蓋道能兼氣。氣能兼辭、辭不當則文斯敗矣。」（全唐文卷五百八十一補闕李君前集序）にみる。韓愈の文章氣力說の代表的なものは「氣水也。言浮物也。水大而物之浮者大小畢浮。氣之與言猶是也。氣盛則言之短長與聲之高下者皆宜」（韓昌黎文集第三卷）である。兩者の文章氣力說の類似性だけではなく、兩者つまり前驅的古文家と古文完成者の文體の落差についても考えさせる恰好の資料であるので、ここに掲載して參考に供することにした。

（五二、五、三〇脫稿）